

“Orbis sensualium pictus”の日本語表題に関する覚書

井ノ口 淳三
(教育学研究室)

A Note on the Japanese Title of “Orbis sensualium pictus”

Junzo INOKUCHI

1. はじめに

教育学の古典といわれる著作の中で、その表題の日本語訳が未だに定着していないものがあるとすれば、それはやはりその著作および著者の教育思想に関する研究が遅れていることの一つの反映と言わざるを得ない。なぜならば、著作の内容についての研究がすすめば、そこで用いられている概念についての適切な訳語は、おのずから定着してくるはずだからである。

コメニウス (J.A. Comenius, 1592~1670) の “Orbis sensualium pictus” (1658) が名高い作品でありながら、これまでその表題にさえ少なからぬさまざまな訳語があてられてきたのも、内容についての共通の理解が不足していたからにはかならない。

たとえば筆者は、ある学会誌に『世界図絵』という訳語を用いて投稿したが、その際レフェリーから次のコメントを受けた。¹⁾ すなわちそれは、『世界図会』という翻訳が戦前は定着していた。しかもそれがたんに orbis pictus でなく、orbis sensualium pictus というラテン語の題字に忠実な訳語であると思う。初版のドイツ語題は die sichtbare Welt となっているが、これもたんに図絵と訳したのでは不備である。やはり図会が望ましい。最近図絵が多いのは残念である」(傍点原文) というものである。

“Orbis sensualium pictus”の訳語としてより適切なのは、『世界図絵』と『世界図会』とのほたしでいづれなのか？ またこれ以外に適切な訳語は考

えられないものか？

この問題を考える手がかりとして、筆者は、まずはじめに戦前における訳語の使用例について検討した。次に、戦後のコメニウス関係の文献に可能な限り目を通し、使用例の傾向を調べた。さらに、sensualium というラテン語の語義について考察し、「図絵」と「図会」という二つの言葉に含まれた日本語上の差異についても吟味した。

これらの検討を経て、筆者は、先述のレフェリーのコメントが必ずしも妥当ではないことを指摘するものである。

2. 戦前における訳語の使用例

学会誌のレフェリーによれば、「『世界図会』という翻訳が戦前は定着していた」とされるが、そのような事実はみられない。

まず第一に、戦前においてはコメニウス関係の文献そのものが、文字通り数えるほどしか存在せず、かつて筆者が調べたところでは、単行本、抄訳、論文等をあわせてもわずかに8篇しかなかったのである。²⁾

第二に、それらの文献のほとんどは『大教授学』の内容を中心とした紹介の域を出ないものであり、“Orbis sensualium pictus”については、まったく触れていないか、触れているとしてもせいぜい略伝の中で、表題のみを記しているという程度にすぎない。

そして第三に、その表題の翻訳を発表時期の古いものから順に紹介すると、『世界図解』、『世界の図絵』、『世界図絵』、『世界図説』、『世界図会』という具合に一つひとつ異なっているのである（第1表参照³⁾）。

以上のことから、登場時期もおそく、ということとはそれだけ定着するのに必要な期間も短く、しかも数の上においてもきわめて少数でしかない『世界図会』という翻訳が戦前は定着していた」とみることとは、とてもできないのである。おそらく戦前における最もまとまった著作と思われる『コメニウス』の中で、『世界図会』という訳語がくりかえし用いられているところから、このような見解が生じたのではないかと推察される⁴⁾。

しかし、この『コメニウス』を含めても戦前においては“Orbis sensualium pictus”の内容に踏み込んだ研究は皆無であった。この著作でさえ、執筆期間を「1653～65」とする初歩的な誤りをおかしているほどである⁵⁾。したがって、仮にいずれの訳語が定着していたとしても、それは著作そのものの内容上の研究を基礎としたものではなかったのである。

3. 戦後における訳語の使用例

戦後のコメニウス研究は、1957年の『教授学著作全集』の出版や1966年の『人事の改善についての総勧告』の刊行、そして1970年の没後300年を記念した諸行事などいくつかの節目ごとに発展してきた⁶⁾。その中で“Orbis sensualium pictus”に言及した文献の数も飛躍的に増加している⁷⁾。戦後の訳語例について検討する際、これが第一に目につくことである。

第二の特徴は、訳語として『世界図絵』を用いているものが圧倒的多数を占めていることである（第2表参照）。レフェリーも指摘するように「最近図絵が多い」という傾向は確かに存在するが、それは最近に限ったことではなく、戦後当初から一貫して多いのである。このことは、「『世界図会』という翻訳が戦前は定着してい」なかったことを重ねて示す結果となっている。なぜならば、もしその訳語が定着していたなら、戦後間もない時期においてもそれが継承されていたはずだからである。

第三に、コメニウス研究者の中には、同一人がいろいろな表現を工夫している場合があり（第3表参照）、訳語問題が内容の理解と関連していることを示している。

コメニウス研究者でさえ、というよりもむしろコメニウス研究者ほど様々な翻訳の可能性を追究し、一つの訳語を定めてそれで事足りるとしていないことがこの表からうかがえる。また、『可感界図示』という訳語を最初に使用した鈴木氏の研究が、この問題においても他の研究者に影響を与えていることがわかるのである。

そして第四に、教育学以外の言語学や児童文学といった分野の人々によって、多様な訳語が採用されていることである（第4表参照）。その場合『世界図絵』という訳語が用いられていないにせよ、「絵」の意味を含めた表現が多く見られることは興味深い。

このように見てくると、戦後“Orbis sensualium pictus”に言及している多くの人の中で、『世界図会』という訳語しか用いたことのない人は、わずかに3人しかおらず、しかもその中の2人は1度限りの使用にとどまっている。結局のところ、戦前戦後を通して終始一貫して『世界図会』しか使用しなかった研究者というのは故梅根悟氏ただ1人しか存在しないのである。このような事実には照らしてみると、「最近図絵が多いのは残念である」という指摘が著しく客観性を欠くものであることは、否定できないであろう。

4. ラテン語および日本語上の問題

コメニウスが旺盛な著作活動に取り組んでいた17世紀においては、それぞれの作品の表題は、内容の簡潔な紹介という性格を持っており、きわめて長いのが通例であった。そして彼もその例にしたがっていた。

たとえば“Orbis sensualium pictus”の場合にも、以下“hoc est omnium fundamentalium in mundo rerum et in vita actionum pictura et nomenclatura”（それは、世界の事物と人生の活動におけるすべての基礎を、絵によって表示し、名づけたものです）という文が続き、これらを含めた全体が正式の表題となっている。

したがって、「たんにorbis pictusでなく、orbis sensualium pictusというラテン語の題字に忠実な訳語」とは何かという問題について考察する場合にも、上記の事情を考慮しておかなくてはならない。つまり、“Orbis sensualium pictus”という表現自体がすでに省略された形であるということである。

しかも、それはさらに「19世紀以来Orbis pictus

というように略して記されてきた」という経過がある⁹⁾。実際、現在刊行中の全集版（プラハ、アカデミア版）の各ページ上段にもOrbis pictusと印刷されているほか¹⁰⁾、欧米の論文で見かけることも珍しくないから、この省略形はある程度「定着」しているものと思われる。

orbis sensualiumというラテン語に忠実な訳語であろうとするならば、すでに幾人かの研究者が試みているように、「可感界」とでも表現すべきであって、「図会」でもまだ不十分であろう。

そもそも「図絵」と「図会」という二つの言葉の間にある日本語上の差異というのはどれほどのものであるだろうか。各種の国語辞典によれば、いずれも「図絵」は「絵、図画、絵画」のことであり、「図会」とはそれらを集めたものを意味している、と共通に説明されている。¹¹⁾「会」には「集まる」という意味が込められているからである。

なるほどそのような区別はあるかもしれないが、しかし日本語上の差異がこの程度であるのに、ラテン語のsensualiumやドイツ語のsichtbareにも配慮した訳語として「たんに図絵と訳したのでは不備である。やはり図会が望ましい」と主張されるのはいかなるものであろうか。ラテン語との関連で言えば、もしも「図絵」を不備であるとする場合には、「図会」も同様に不備なのではあるまいか。

あくまでもsensualiumという語にこだわるのなら、やはり「感覚の」という意味に相当する内容を持つ日本語を使用しなければならないであろう。それにしても「可感界」や「被感物（界）」という訳

語は、日常使われることもないなじみのうすい言葉である。いかに専門的学術用語とはいえ、意味の理解しにくい訳語をことさらに用いる積極的な意義は、この場合認められない。

それらを使用するのなら「図解感覚世界」のほうがまだわかりやすいように思われる。しかし、この表現も「感覚」という表現を直接に盛り込むことによって、かえって内容が理解しにくくなる恐れがある。それはラテン語の「属格」を名詞的に翻訳することによって、日本語の語感との間にズレが生じるからであろう。また、「感覚世界」と言われてもそれがどのようなものなのか把握しにくいし、作品の内容を的確に表現しているとも思われない。

もしも「感覚」という言葉を生かすなら、少し長くなるが、『絵によって感覚される物象の世界』という表現が比較的よく内容を伝えていることになる¹²⁾。

いずれにせよ、ここでは「図絵」と「図会」という二つの言葉に含まれる日本語上の差異は、ほとんど考慮しなくてもよいと考えられる程度のものであることを重ねて指摘するにとどめたい。

5. おわりに

さて、以上に見てきたように、戦前における訳語の使用例、戦後の動向、そしてラテン語および日本語上の語義について順に検討してきた。これらのことから、“Orbis sensualium pictus”の訳語は『世界図会』の方が望ましいとするレフェリーのコメントには明確な根拠がなく、『世界図絵』という訳語

第1表 戦 前 の 例

『世界図解』	本庄 太一郎	1894(明治27)年	『教育古典』 博文堂, 27ページ
『世界の図絵』	国民教育学会	1899(明治32)年	『日本之小学教師』 第1巻第5号 金昌堂, 33ページ
『世界図絵』	辻 幸三郎	1924(大正13)年	『聖の世界と教育』 目黒書店 25ページ
『世界図説』	田制 佐重	1924(大正13)年	『新訳世界教育名著叢書』 第5巻, 文教書院, 152, 156ページ
『世界図会』	佐佐木 秀一 (梅根 悟)	1939(昭和41)年	『コメニウス』 岩波書店 1,49,151,152,155,156ページ

第2表 戦後の例

『世界図絵』の使用例

兵藤 三平	1948年	『新教育の先駆者コメニウス』 交友社, 67ページ
大田 堯	1949年	『近代教育とリアリズム』 福村出版, 24, 26, 27, 29, 33, 35ページ
荘司 雅子	1953年	「宗教的感覚的實在論—コメニウス『大教授学』の意図」 『教育科学』第10巻, 25ページ
稲富栄次郎 訳	1956年	コメニウス『大教授学』 玉川大学出版部, 401, 406ページ
稲富栄次郎	1970年	「コメニウスとチェコスロバキア」『全人教育』254号, 10, 13ページ
田中 昭徳	1959年	「現代教育とコメニウス」長田新編『国際理解の教育』 育英書店, 176, 183ページ
鈴木 謙三 訳	1961年	H. ホルンシュタイン「コメニウスの教授学とその分析的基礎」 教育哲学会『教育哲学研究』第4号, 68ページ
野村 滋 訳	1969年	ベッティナ・ヒューリマン『子どもの本の世界』 福音館書店, 3, 84, 85, 90~92, 96~99, 112ページ
高橋 勉	1969年	「代理経験のメカニズム(2)」早稲田大学教育学部『学術研究』 第18号, 88ページ
高橋 勉	1975年	「コメニウス “Pampaedia” (汎教育) にみられる生涯教育の 構想について」早稲田大学教育学部『学術研究』第24号, 6ページ
小原 国芳	1970年	「コメニウスを慕いて」『全人教育』254号, 2, 3ページ
貴島 正秋	1972年	「コメニウスの学校改新論について」『芦屋女子短期大学紀要』 第6号, 22ページ
石井 正司	1972年	「コメニウスにおける直観教授」『奈良教育大学紀要』第21号, 194, 199, 204, 205ページ
石井 正司	1981年	『直観教授の理論と展開』 明治図書, 22, 27, 29, 36, 41~43, 52~54ページ
谷口 政己	1974年	「J. A. コメニウスにおける言語教授学の構造」大阪教育大学大 学院『院生論集』第1号, 23ページ
大橋 岑吉	1976年	「教師としての母親—コメニウスを中心とした」『大阪樟蔭女子 大学論集』第13号, 189, 190ページ
青木由紀子 訳	1978年	ウィリアム・フィーヴァー『こんな絵本があった 子どもの本の のさし絵の歴史』 晶文社, 10ページ
太田 光一	1979年	「西欧近代における人間観の転換と知と徳」東京大学教育学部 教育史・教育哲学研究室『研究室紀要』第5号, 45ページ
太田 光一	1985年	「コメニウスの発達段階論」『高知大学教育学部研究報告』第37 号, 26ページ
太田 光一	1986年	「コメニウスの『総勸告』研究ノート (その1)」『高知大学教 育学部研究報告』第39号, 3ページ
佐藤 守	1980年	「近代実学主義の教育思想の形成」『龍谷大学論集』第416号, 8ページ

丘澤 静也 訳	1981年	ヴァルター・ベンヤミン『教育としての遊び』 晶文社, 16ページ
多木 浩二	1981年	「書物と読者」『本』 講談社, 1 ページ
佐藤英一郎	1982年	『大教育家 生涯と思想』 金子書房, 44,48ページ
市川 定三	1983年	『『大教授学』にみるコメニウスの人間観・教育思想について』 『鶴見大学紀要』第19号, 36ページ
三宅 興子 他	1983年	『児童文学 はじめの一步』 世界思想社, 154,194ページ
延藤 安弘	1983年	『こんな家に住みたいナ 絵本にみる住宅と都市』 晶文社, 132 ページ
森田 孝	1984年	「人間の生涯と教育理解」西村皓他編『教育の根底にあるもの』 以文社, 229ページ
柴田 義松 他	1985年	『人間・ヒトにとって教育とはなにか』 群羊社, 133,152ペー ジ
新堀 通也	1985年	『「殺し文句」の研究』 理想社, 300ページ
秋葉美也子	1985年	「コメニウスの幼児教育論(1)」『乳幼児の教育』第30号, キュク リヒ記念財団, 25ページ
秋葉美也子	1986年	「コメニウスの幼児教育論(3)」『乳幼児の教育』第33号, キュク リヒ記念財団, 13,16ページ
石附 実	1986年	『教育博物館と明治の子ども』 福村出版, 95,96ページ
ヴラスト・チハーコヴァー	1987年	『プラハ幻景』 新宿書房, 224ページ

『世界絵図』の使用例

大崎平八郎 訳	1954年	コンスタンチーノフ監修『世界教育史』第1巻, 青銅社, 76ペー ジ
小川 太郎	1980年	『教育学著作集』第6巻, 青木書店, 51ページ
杉山 明男	1983年	「コメニウスの世界絵図(その1), (その2)」『どの子も伸び る』4,5月号, 部落問題研究所, 80~82,86~88ページ

『世界図会』の使用例

梅根 悟	1956年	『コメニウス』 牧書店, 48~51ページ
梅根 悟	1968年	『西洋教育思想』第1巻, 誠文堂新光社, 224ページ
梅根 悟	1972年	「コメニウス文庫のこと」『図書館雑誌』第66巻11号, 日本図書 館協会, 3 ページ
梅根 悟 監修	1975年	『世界教育史大系23 初等教育史』 講談社, 47ページ
井谷 善則	1973年	「コメニウスの幼児教育思想」『幼児の教育』第72巻6号, フレー ベル館, 71ページ
松居 直	1983年	『絵本を読む』 日本エディタースクール出版部, 140ページ

第3表 コメニウス研究者の例

鈴木 秀勇（琇雄）		
『可感界図示』（『世界図絵』）	1962年	「コメニウスの『教育思想』」『教育』150号、国土社、103ページ
『可感界図示』	1982年	『コメニウス「大教授学」入門』 明治図書、上巻、27,28ページ、下巻、109,122,134～136ページ
江藤 恭二		
『世界図絵』、『世界図会』	1959年	ローベルト・アルト『コメニウスの教育学』 明治図書、19,88,100,112,132,137,221,225,230ページ
『世界図絵』（『可感界図解』）	1967年	『西洋教育史叙説』 福村出版、85,133,218,228,235ページ
『世界図絵』	1985年	『世界子どもの歴史5 絶対主義・啓蒙主義時代』 第一法規、38,69,70,73ページ
堀内 守		
『可感界図絵』、『世界図絵』	1963年	「〈神の三書性〉とコメニウス教育学の方法的発展」教育哲学会『教育哲学研究』第8号、48ページ
『可感界図解』	1969年	「コメニウスの《方法》の問題」『名古屋大学教育学部紀要』第15号、170ページ
『可感界図示（世界図絵）』	1970年	『コメニウス研究』 福村出版、39,250,271,288ページ
『世界図会』	1971年	「各国のコメニウス研究の動向」『名古屋大学教育学部紀要』第17号、128ページ
『可感界図示』（『世界図絵』）、『可感界図示』（『世界図会』）、『世界図絵』	1984年	『コメニウスとその時代』 玉川大学出版部、27,28,32,40,198,257,326ページ
藤田 輝夫		
『世界図会』	1974年	「J.A. コメンスキーの“直観教授”の源流」『秋田大学教育学部紀要』第24集、133ページ
『世界図絵』	1976年	長尾十三二編『教職課程演習3 教育史』 協同出版、153ページ
『世界図会（被感物総覧）』、『被感物総覧（世界図会）』、『被感物総覧』	1982年	松島鈞他編『現代に生きる教育思想』第7巻、ぎょうせい、127,138,154ページ
『被感物界総覧（世界図絵）』	1986年	「コメンスキーの『教授学』から『大教授学』への理論的發展」日本教育方法学会『教育方法学研究』第11巻、10ページ
『被感物総覧（世界図絵）』	1986年	コメンスキー『母親学校の指針』 明治図書、124,125,127,132,133ページ
梅津 勝		
『世界図絵』	1975年	「『世界図絵』の認識論的基礎」『北海道大学教育学部紀要』第25号、205～208,212～215,217,218ページ
『世界図絵』、『可観界図示』	1986年	「J.A. コメンスキーの教授学の基本原理」『帯広畜産大学学術研究報告』第7巻1号、1,10,12,15,16ページ
佐藤 令子		
『世界図会』	1976年	「コメニウスの『地上の迷路』—絶望からの回帰—」『橘女子大学研究紀要』第4号、13ページ
『世界図会』（『可視界図』）	1982年	『普遍的教科書Panbibliaとしての世界図会 Orbis Sensualium Pictus』『寧楽史苑』第27号、43ページ

第4表 教育学以外の分野の例

『絵画の世界』	矢崎源九郎他訳	1957年	ポール・アザール『本・子ども・大人』、紀伊國屋書店、55,262ページ
『図解百科』	村山 七郎	1969年	「コメニウスの著作の最初の日本語訳」『教育と医学』 慶応通信、71ページ
『絵の中の世界』	千野 栄一	1975年	「チェコスロバキア」『東欧』 講談社、97ページ
『絵でみる世界』	千野 栄一	1976年	「チェコスロバキアの子どものための文学外観」『日本とチェコスロバキア』48号、日本チェコスロバキア協会、23ページ
『絵で見る世界の本』	寿岳 文章他訳	1979年	ホグベン『洞窟絵画から連載漫画へ』岩波文庫、209ページ
『絵解き図解』	瀬田 貞二	1982年	『落穂ひろい』上巻、福音館書店、68ページ
『図解感覚世界』	村山 七郎	1985年	「ニカレクシコンチ スラヴェノニフォンノコトバント ゴンザ編『新スラヴ・日本語辞典』日本版について」『窓』、52号、ナウカ、5ページ
『図解感覚世界』	興水 則子 訳	1987年	V.M.アルパートフ「『新スラヴ・日本語辞典』日本版の書評」『窓』、61号、ナウカ、33ページ

を「不備である」とした判断は妥当性に欠けるものである、と言わざるを得ないのである。

検討の結果は、むしろ逆に『世界図絵』の「定着」ぶりを示すものであった。しかし、誤解を避けるために強調しておくが、筆者は、『世界図絵』という翻訳が望ましいとか、あるいは『世界図会』と訳したのでは不備である、とかの主張をしているのではけっしてない。この二つに限って言えば、優劣をつけるほどの差異はないとするのが筆者の立場である。だからこそ筆者自身これまで両方の訳語を使用してきたのである。

いずれにせよ、訳語の問題は研究水準の反映であり、その意味で“Orbis sensualium pictus”そのものについての内容上の考察を、今後いっそうすすめていかなければならないのである。¹³⁾

なお、本稿は、1987年10月2日、日本教育方法学会第23回大会において発表した内容に、加筆修正を施したものである。

註

- 1) 拙稿『『世界図会』の異版本に関する一考察』

『教育方法学研究』第12巻、日本教育方法学会、1987年。

- 2) 拙稿「コメニウス関係日本語文献目録」『教育学研究』第44巻第3号、日本教育学会、1977年。
- 3) この表にはのせていないが、1895～97（明治28年～30）年頃の岡山県尋常師範学校での講義録（原田新一筆記）にも『世界の図絵』という表現が見られる。なお、この講義録は蔵原清人氏（工学院大学）にお借りしたものである。
- 4) 後年「これは佐佐木秀一先生の依頼によって私が書いたもの」と、梅根悟氏は述べた。『コメニウス』、牧書店、1956年、158ページ。
- 5) 佐佐木秀一、『コメニウス』、岩波書店、1939年、49ページ。なお、戦後の論文にもこれと同様の記述をしているものが二、三ある。
- 6) 太田光一、「コメニウスの『総勸告』研究ノート（その1）」『高知大学教育学部研究報告』、第39号、1987年、参照。
- 7) 太田光一氏と筆者が共同で作成し、日本教育学会第46回大会（1987年）において配布した資料「コメニウス関係日本語文献目録（1976年以降）」には、最近10年間に発表された75の文献を記載し

ている。

8) この表に記載している文献以外にも『世界図会』の訳語を採用しているもののあることを承知しているが、「通史の一部としてコメニウスを論じているものは原則として収録しない」という方針をとった結果、このようになったものである。もちろんそれは『世界図絵』や他の訳語についても同様である。

9) J. A. Comenius Geschichte und Aktualität 1670~1970. Band 2 Eine Bibliographie des Gesamtwerkes, hrsg. v. H. J. Heydorn. 1971. S. 74.

10) J. A. Comenii; Opera Omnia 17, 1970, pp.59-300.

11) 『広辞苑』, 『日本国語大辞典』, 『学研国語大辞典』などによる。

12) コンスタンチーノフ監修, 大崎平八郎他訳『世界教育史』第1巻, 青銅社, 1954年, 83ページにこの表現が見られる。

13) 拙訳『世界図絵』, ミネルヴァ書房, 1988年, がそのための一助となれば幸いである。

（昭和62年10月22日受理）